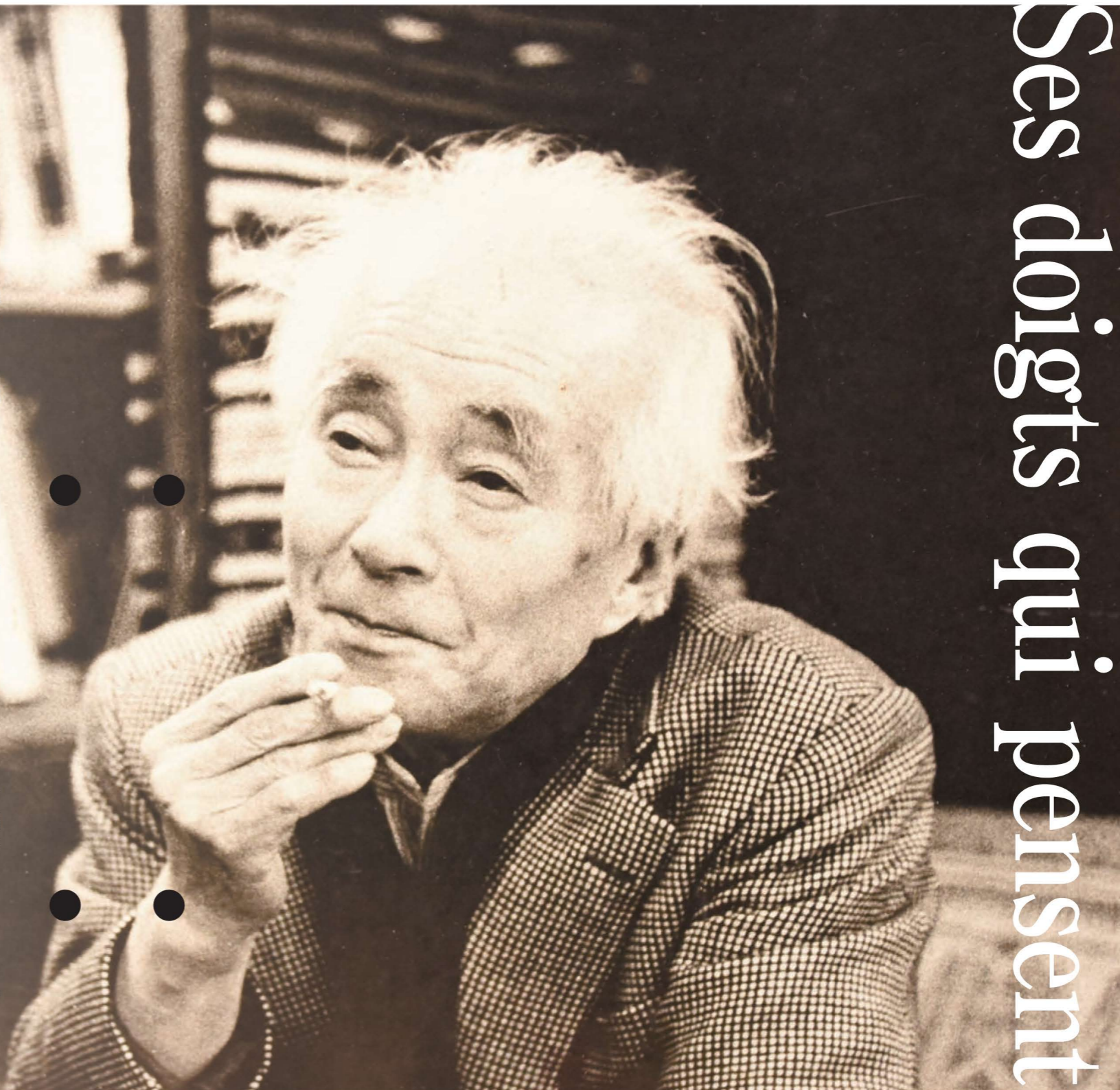


## 年譜～高田博厚の歩んだ道～

- 1900(明治33)年 8月19日、能登(石川県)の七尾で、福井県出身司法官高田安之助、母敏子の三男として生まれる。
- 1902(明治35)年 父の弁護士開業のため、福井市に一家で移り住む。
- 1913(大正2)年 福井県立福井中学校(現藤島高等学校)に入学。文学・美術・哲学などの本に親しむ。
- 1918(大正7)年 福井中学校を卒業し上京。その頃知り合った高村光太郎の勧めで自画像を岸田劉生に見せに行く。
- 1919(大正8)年 東京外国語学校イタリア語科に入学。
- 1921(大正10)年 東京外国語学校(現東京外国語大学)を退学。雑誌『白樺』に『ミケランジェロの手紙』の翻訳を1年間にわたり連載する。高村光太郎に紹介された岩波茂雄(岩波書店)からコンディヴィ著『ミケランジェロ伝』の翻訳と註釈を頼まれる。この頃から彫刻を本格的に始め、制作中の作品を高村と見せ合うようになる。
- 1926(大正15)年 フランスの作家シャルル・ヴィルドラックが来日。ロマン・ロラン(作家)の紹介状により、高村光太郎、片山敏彦(詩人)、倉田百三(劇作家)らと共にヴィルドラックと親交する。この頃築地劇場では、ヴィルドラックやロラン、マルセル・マルチネ(詩人)の作品が上演されている。
- 1927(昭和2)年 武者小路実篤主唱の「大調和展」に出品。
- 1931(昭和6)年 単身フランスに渡り、片山敏彦の紹介でロマン・ロランをはじめとするパリの知識階級の人々と親しく交わる。スイスに滞在していたロランに招かれ、彼の家に滞在していたマハトマ・ガンジーを描く。
- 1934(昭和9)年 フランスから日本の「国展」へ3点を出品。
- 1937(昭和12)年 淡徳三郎(社会評論家)と共に在欧日本人を対象とした日刊新聞「日仏通信」を発刊。
- 1938(昭和13)年 巴里日本美術家協会設立。
- 1939(昭和14)年 第二次世界大戦勃発。
- 1940(昭和15)年 フランスがドイツ軍に占領される。毎日新聞社嘱託としてパリ及びヴィッシー特派員を務める。パリ外国人記者協会副会長を務める。
- 1944(昭和19)年 在仏日本大使館に要請されベルリンに行く。
- 1945(昭和20)年 ドイツ軍が降伏。ソビエト軍に保護される。日本送還の道を選ばず単身フランスに向かい、難民として保護される。収容所で1年半を過ごす。
- 1946(昭和21)年 12月、フランス当局の要請によって、収容所を出てフランスに戻る。
- 1949(昭和24)年 日仏間文通再開と共に読売新聞社嘱託となる。
- 1950(昭和25)年 「フランスから」「フランスと日本と」刊行。
- 1951(昭和26)年 カンヌ映画祭日本代表となり、以降10年間務める。
- 1957(昭和32)年 27年ぶりで日本に帰る。パリを出発する前、在仏中に制作した全作品を壊し、数千冊の書籍だけを持って単身船で帰国。新宿区西落合の借アトリエに住み、彫刻制作を再開する。以降、新制作協会会員、日本美術家連盟委員、日本ペンクラブ理事、東京芸術大学講師その他を務めるが、徐々に引退し制作のみに専念する。
- 1958(昭和33)年 高村光太郎賞選考委員となる(1967年まで)。
- 1966(昭和41)年 鎌倉に住居とアトリエを建て移る。
- 1972(昭和47)年 夫人に頼まれて、川端康成の死面(デスマスク)をとる。
- 1987(昭和62)年 6月17日、逝去。高坂彫刻プロムナードの一部(16点)が整備される。
- 2000(平成12)年 東松山市、群馬県前橋市、岩手県盛岡市で「生誕100年記念高田博厚彫刻展」を連続して開催。レオン・ドゥーベル(1934年制作・パリ)と裸婦(1942年制作・パリ)を公開する。
- 2017(平成29)年 高田博厚没後30年展を東松山市(高坂図書館)、安曇野市(安曇野市豊科近代美術館)、福井市(福井市美術館)、鎌倉市(鎌倉芸術館)で順次開催する予定。



Ses doigts qui pensent

### 高田博厚没後30年イベント ～もっと詳しく知りたい方へ～

#### □彫刻家高田博厚没後30年展

と き 6月1日(木)～7月2日(日)午前9時30分～午後5時  
※6月26日(月)休館

ところ 高坂図書館

内容 鎌倉のアトリエに所蔵されている彫像やデッサンなどの展示

#### □思索の灯

と き 6月17日(土)午後0時30分開場、午後1時開演

ところ 松山市民活動センター

内容 高田ゆかりの人物やアーティストが人柄や世界観に迫る講演会及びコンサート

講師 浅見洋さん(石川県西田幾多郎記念哲学館館長)

室町澄子さん(元NHKラジオ深夜便アンカー)

高橋純さん(国立大学法人小樽商科大学名誉教授)

コンサート 高橋在也さん(ピアノ)、井村果奈枝さん(チェロ)、妻沼絢子さん(朗読)、石原麻伊さん(絵画)

#### ■共通事項

問合せ 社会教育課 ☎21-1431 ☎23-2239

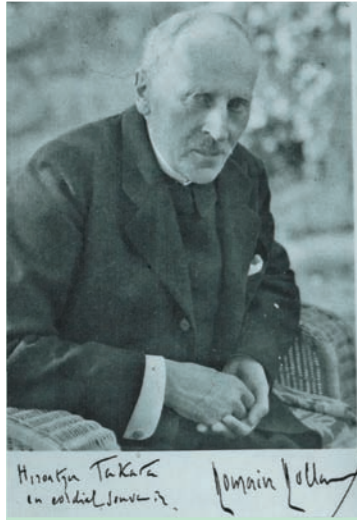
# 思索の道

「高坂彫刻プロムナード」を飾る32点の作品。これらは全て一人の作家高田博厚による作品です。今年はその没後30年と高坂彫刻プロムナードができてから30周年に当たります。高田博厚は芸術家として絵画、彫刻、音楽を追及する傍ら、思想家として、日本国内

## 高田博厚

### 没後30年特別企画

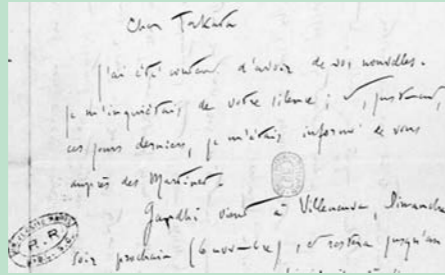
での幅広い交友関係や、30年近く暮らしたフランスでも多くの知識人と交流し、深い思索やその活動を残してきました。今回は日本を代表する彫刻家高田博厚について、その一端をご紹介します。



ロマン・ロラン

※ロマン・ロラン  
1866年～1944年  
フランスの作家  
1915年にノーベル文学賞を受賞  
著書「ジャン・クリストフ」

(略) ガンジーが次の日曜日にヴィルヌーヴにやってきて、12月11日金曜日の晩まで滞在します。彼とそのインド人の供の者たちのために、私が持っている二つの別荘の一つを彼らに使用してもらうことにしました。私は、たぶんあなたなら、ガンジーに出会って彼のクロッキーを幾つか描くことができたらうれしいのではないかと思いました。ついてはこの封筒の中に百フランス・フラン三枚を入れておきます。(略) その間5・6日間のあなたの出費は私が引き受けます。(略) た



ロランから高田宛ての手紙冒頭部分

にもこのことは話さないでください。(略)  
近いうちにあなたと握手できますように。  
心より  
ロマン・ロラン

## 親愛なる高田へ

高橋名誉教授の発見した手紙の内容から、ロマン・ロランが高田に自身の肖像彫刻を作してほしい旨依頼したことや、片山敏彦の妻が亡くなった際にロランに見舞状を書くようお願いしたりと、親密なやりとりがされていたことを読み取ることができます。

中でもロマン・ロランのもとをガンジーが訪ねる際に、ロランが高田にだけクロッキー(速写画)でも描いたらどうかと旅費まで入れて送ったという手紙(上)とそれに対する高田の返事(下)を紹介します。

※片山敏彦(かたやま としひこ)  
1898年～1961年  
詩人、文学研究者

## ロマン・ロランと高田の往復書簡 Correspondance

親愛の情と共に心より  
高田博厚

私は今朝あなたから届いた手紙に感激のあまり、私に対するあなたの配慮にどのよう

ロマン・ロラン先生



ロマン・ロラン邸で仕事の高田 (1932年)



たかはし 高橋 あつし 純さん

国立大学法人小樽商科大学名誉教授。フランス文学者。ロマン・ロランの死後、パリのフランス国立図書館に遺族が寄贈した「ロマン・ロラン寄贈資料」を閲覧し、ロランと高田博厚の間で交わされた複数の書簡や日記から当時ロランが高田を高く評価していたことなどを発見した。2016(平成28)年にフランスで開催された「ロマン・ロラン生誕150周年記念国際シンポジウム」には日本人で唯一招待され、ロランと高田の往復書簡の発見について報告した。

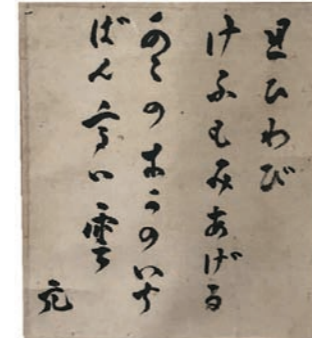
## 詩人 高橋元吉の色紙

渡仏する直前、親友である詩人の高橋元吉に「お前色紙を一枚書け。フランスへ持ってゆく」と書いてもらった色紙。「思ひわび けふもみあげる 雲のなかの いちばん高い雲」  
フランスでは何度も転居しているが、高田はこの色紙を常にアトリエや書斎に飾っていた。

※高橋元吉(たかはし もときち)  
1893年～1965年  
詩人、書店換字塾社長



高田(左)と高橋元吉(右)



色紙



若き日の高田(左)と自画像(右)

## 自画像

上京してすぐに知り合った高村光太郎の勧めで、岸田劉生に自画像を見せに行く。自画像を見た岸田は大変に褒めたが、その時目にした制作中の『麗子像』を見て驚嘆する。  
『あいつには一生かかってもかなわない』。高田は画家になることを断念した。

※岸田劉生(きしだ りゅうせい)  
1891年～1929年  
洋画家

## 様々な出会い

## Rencontres



ジョルジュ・ルオーの彫刻 (高田作)

## SYSTEME DES BEAUX-ARTS(芸術論)

渡仏してすぐマルセル・マルチネからアランを紹介されてその後親しく交友するようになる。アランの著作である「芸術論」の普及版に「今日、僕たちが話したことを書こう」と書いて書いたもの。『物象なしには思考しない。(略)行動なしには絶対に思考しないことなのである』この言葉は高田に大きな影響を与えた。

※ジョルジュ・ルオー  
1871年～1958年  
フランスの画家  
代表作「キリストの顔」

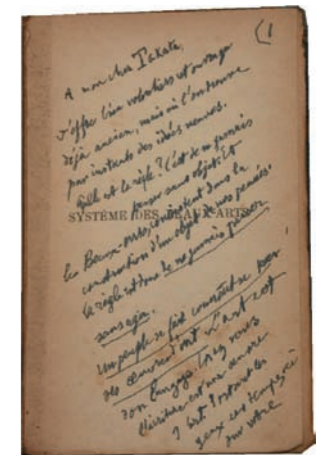
## ジョルジュ・ルオーとの別れ

幸福な運命により、あなたと同じ道に就けた。できる限りあなたに近づきたい。高田はルオーを慕っていた。  
日本への帰国直前、年老いたルオーに会いに行く。「もう会えないだろう」と感じた高田の手をルオーは両手で包むようにして離さない。そしてまぶたを閉じたまま微笑んだ眼に涙が光っているのが見えた。

※アラン  
1868年～1951年  
フランスの哲学者、評論家  
著書「幸福論」



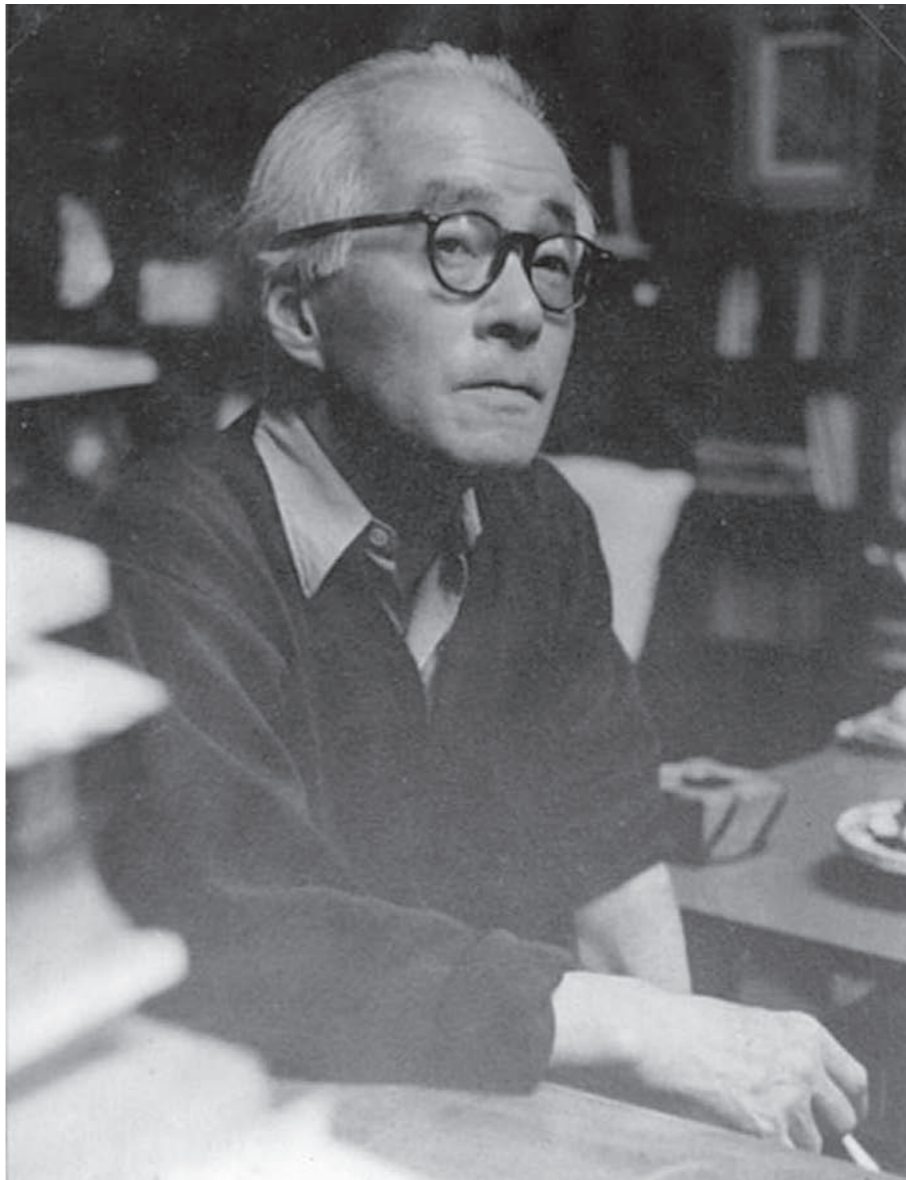
アラン



芸術論の1頁目にTakataとある

# 高田の思い出

## Une promenade de la pensée



おののよしこ 大野慶子さん  
神奈川県鎌倉市に今も残されている高田のアトリエの管理者。高田の妻・常は義理の母にあたる。

れました。毎日アトリエに出かけて、言われたとおりに作品に濡らした布をかぶせていました。絞りが甘かったんですよ。数日後、いつものようにアトリエを訪れてびっくり、1か月くらいかけて制作していた宮澤賢治の像が崩れて彫刻台から下に落ちていました。フランスは夜中の時間でしたが、あわてて電話すると「大丈夫。彼のイメージはできてるから、帰ればすぐに作れるよ」と少しも怒らず、帰国するとあつという間に賢治の像を復元したのには、本当に驚かされました。



神奈川県鎌倉市にあるアトリエ

高田博厚と大野常(義母)が再婚したとき、すでに私は大野家に嫁いでいました。義理の父となる高田には「よしこ」がなまって「ヨコ」と呼ばれ、とつても可愛がってもらいました。高田は、毎日朝から夕方までアトリエにこもり、仕事を欠かさない人でした。怖いくらい集中して粘土をいじっているにもかかわらず「ご飯ですよ」と声をかけると「はいよ」とすぐに手の泥を洗い落として食卓についでくれる、そんな人でした。母を連れてフランス旅行に出かける際「粘土が乾かないよう濡れた布を換えておくれ」と造りかけの彫刻作品の養生を頼ま



なかむらみつりのり 中村光紀さん  
元岩手日報社記者。定年退職後に岩手大学芸術文化講師、もりおか啄木・賢治青春館館長などを経て、現在は萬鉄五郎記念美術館館長。

### 精神性を造形化

「おろしそば」を自慢されてきました。盛岡ではいつも同じ老舗そば屋で「このわんこそばは精神的な味がする」と称賛して、一緒にわんこそばを食べたことを懐かしく思い出します。盛岡市役所にある高田彫刻「新渡戸稲造」は、設置した当時ロダンの「バルザック像」同様似ていないと盛岡で論争になりました。東松山市にもあるようですが、私は苦悩する新渡戸の精神性を見事に造形化し「内部から語りかけてくる」肖像彫刻の傑作だと思っています。

高田博厚さんとの出会いは、1973(昭和48)年に岩手日報社で開催した彫刻家「ザツキン大回顧展」の記念講演会に講師としてお迎えしたときで、それ以来亡くなられるまでお付き合いいただき、多くのことを学ぶことができた感謝しています。当時毎年のように開催されていた「高田博厚展」や「一元会展」のために、よく盛岡へお越しになり、地元の美術愛好家らとお酒を飲みながら芸術談義をしていただき、実に楽しいひとときを過ごした覚えがあります。そば好きで、よく郷里福井の



わんこそばをすすむ高田(左は弟子沖村氏)



宮澤賢治像をつくる高田

sculptures  
H.TAKATA=高田博厚作品集  
編集 座右宝刊行会



宮澤賢治



新渡戸稲造

### 人間の内面を表現

前橋市にある書店の煥乎堂で、文芸講座や絵画・彫刻作品の企画展示を手掛けていた私は、当時よく高田博厚さんのアトリエを訪ねていました。連れだって鎌倉の繁華街に食事に出かけた折など、様々な出来事があったことを思い出します。中でも強く印象に残っているのは、宮澤賢治の首を作っている高田さんを見た時でした。賢治と直接の面識がなかった高田さんは、イーゼルに立てかけたキャンパスに賢治の幼少期や青年期のいろいろな角度の写真を貼っていました。また、賢治の

全集や単行本など、当時手に入る限りの書籍が机に積んであり、高田さんはその全てに目を通していた様子でした。「東北人は顔がのっぺりしていて難しいんだよな」なんて言っていました。そんな表面的な顔を作っているのではなかったのだと思います。一つの彫刻作品を制作するために、一人の人間の精神まで徹底的に調べ上げてしまう。まさに高田さんの肖像彫刻は、人間の内面を描き出そうとした作品なんだなと感動したことを今でもよく覚えていています。



おかだよしやす 岡田芳保さん

前橋の書店、煥乎堂の元常務、群馬県立図書館と県立土屋文明記念文学館の館長を一度に務め、現在は詩人・書家「住谷夢幻」として作家活動中。